住み慣れた地域で暮らし続けるためのお宝探し情報紙

MiYaGi

# まちづくりと地域支え合い

多賀城市の「丘の上の女子会」。両端にいるのが生活支援コーディネーターで、左側が今野まきこさん

CONTENTS


2-3 「まちづくりの今」⑩　角田市
「住民が先生」教わる姿勢で地域に入る
黒田由希子さん（角田市生活支援コーディネーター）

4-5 「まちづくりの今」⑪　多賀城市西部地域
ケアマネの利点活かして地域と関わる
今野まきこさん（多賀城市西部地域担当生活支援コーディネーター）

6-8 「第４回
宮城発これからの福祉を考える全国セミナー」を
開催しました！


宮城県内外の
生活支援コーディネーターおよび協議体の
取り組みを発信しながら、
住民や専門職・関係機関の意識を高め、
最後まで住み慣れた地域で暮らし続ける
社会づくりを目指します。


vol.27
2020.3

生活支援コーディネーターに聞く

# 「まちづくりの今」⑩ 角田市

**角田市**

【かくだし】人口2万8728人（1万1413世帯）、高齢化率35.0%（2019年12月末）。生活支援コーディネーターは市社会福祉協議会に4人、市地域包括支援センター（市健康長寿課）に2人配置。全員第1層担当だが、実際の活動では自治センター圏域（9地区※ほぼ小学校区に相当）や行政区単位（93地区）にも軸足を置く。市社協と包括は月例の連絡会議で情報を共有し、介護予防や地域づくりで密に連携。協議体は当面第1層のみの設置とし、包括が事務局を務める。

# 「住民が先生」教わる姿勢で地域に入る

## 黒田由希子さん

黒田由希子さん（市社協の事務所で）

### 高齢者が持つ「強み」を知る

「住民に教えてもらおう。教わる立場で地域に入っていこう」

黒田由希子さんがそうした心掛けを持つようになったのには、理由がある。

2017年4月に角田市の生活支援コーディネーターとなってすぐ「住民に顔を覚えてもらい、信頼関係を築きたい」とサロン巡りを開始。

半年あまり経ったある日、高齢者が昔遊びや伝統の手仕事を伝授する多世代交流サロンを訪ねる。小学生がしめ縄づくりを習っていた。

「やったことないなら、あんたもやってみたらって誘われたんです」

子どもたちに交じって、初めてのわら細工に挑戦。講師役の高齢者は、「遠慮なくどんどんつくれ」「上手になってきたぞ」と励まし、丁寧に手ほどきしてくれた。

「講師の皆さんはとてもいきいきして、教えることに喜びを感じている様子でした」

そこに住民との関わり方のヒントがあった。

黒田さんはもともと、市社会福祉協議会の地域福祉部門で福祉・レクリエーション用具の貸し出しや福祉教育、福祉送迎サービス、広報紙の編集などを担当。生活支援コーディネーターとなって、従来より積極的に地域に赴き、住民と、特に高齢者と、関わることが求められるようになった。しかし、サロン巡りをしても今ひとつ手応えを得られない。焦りが募るなか、しめ縄づくりが突破口を開く。

「そのとき、支援する・されるといった立場の違いを超えて、（高齢者と）つながれたと実感したんです」

向こうが先生、こちらは生徒。「教わる」ことで会話も弾んだ。

「積み重ねてきた知識や経験、好きなこと、得意なわざなど、高齢者が持つ『強み』を教えてもらうことが肝心。それが私にとっても楽しい」

出会いを喜び、楽しい時間を共有して関係を築く。

サロンに限らず、さまざまな集いの場を探し出し、教わる姿勢で入っていく。そこにある住民同士のつながりと、つながりのなかで行われる見守りや支え合い、介護予防に役立つ活動などを「地域のお宝」として掘り起こす。

ある農村集落の高齢女性2、3人が毎夕4時ごろ、シルバーカーを押しながら一緒に散歩とおしゃべりを楽しんでいる。黒田さんはさっそく行ってみた。女性たちの趣味や特技、たとえば読書、漬けものづくり、手芸、畑仕事などを手がかりに会話を重ねる。あっという間に打ち解け、写真も撮らせてもらった。

初めて会った人も、不思議と黒田さんには、ためらいなくプライベートな暮らしの様子を語って聞かせる。

「日常の暮らしぶりに関心を持たれ、教えを乞われ、お宝と評価されるのがうれしいのだと思います」

強みだけでなく、自分や家族が抱える病気、障害などの「弱み」を打ち明

ける人も少なくない。

「相談したいとか解決してほしいとかじゃなく、人生の苦労を一生懸命、乗り越えてきたことへの共感を求めているようです」

もちろん話の内容によっては、介護や福祉の相談窓口につなぐ対応もあり得る。

取材した情報は、お宝専用のチラシマップ「かくだのTAMARIBA」や市社協広報紙などに掲載するほか、市民向けのお宝発表イベントで紹介する。

イベントは、市・市社協共催の「地域福祉フォーラム」。2017年度以降、年1回開いている（※2019年度の第3回フォーラムは台風19号災害の影響で中止）。

2019年1月に「かくだ田園ホール」で開催した第2回フォーラムでは、3つのお宝がステージ上で紹介された。うち一つが「後藤商店」（囲み記事）

## 災害対応も「貴重な経験」に

「後藤商店は、地域のお茶飲み場。行きたいときに行き、帰りたいとき帰られる、自由な交流サロンのよう」

黒田さんは、店のお茶飲みには交ぜてもらえたが、店主の後藤美智子さん（82歳）や店に集う仲間たちにお宝の意味や価値の説明をしても、『えー？ただ集まってお茶飲んでるだけだよ』といった反応が返ってくるばかり。

フォーラム登壇の打診にも、『それほどのことはしていない』と及び腰。黒田さんは、「この店は本当にすばらしい。多くの人に知ってほしい」とその意義を重ねて伝え、承諾を得た。

フォーラムには後藤さんとお茶飲み仲間2人に加え、毎週火曜に店に来る移動販売車の店員も招き、商店が集いの場になっている様子を紹介。多くの市民が共感を示し、喝采を受けた後藤さんらの意識も変わった。

「登壇してからというもの、店に集う人たちは、後藤さんに『あなたがいてくれるから私たちはここに来られる』『ここがあるおかげで私たちは元気でいられる』としきりに伝えています。後藤さんはそのたびに『あんたたちのおかげで私も店を続けられる』と言うんですよ」

店を「高齢になっても元気に暮らすのに役立つお宝」と明確に意識し、「お宝のある暮らし」を守ろうとしている。黒田さんの関わりが、後藤商店を「小さな協議体であると同時に地域づくりの実践の場」にした。

ところで、黒田さんは取材やフォーラム登壇を断られたことがない。「教わる」姿勢や気さくな人柄の恩恵もあるが、お宝へのアプローチを民生・児童委員と連携して行っていることも影響しているだろう。

市内に87人いる民生・児童委員は、地域の状況をよく知っていて、お宝の情報も提供してくれる。最初にお宝を訪問する際は、情報を寄せた民生・児童委員から当事者へ連絡しておいてもらう。現場には初回からすんなり入れることが多い。

2019年10月12日、角田市は台風19号による大規模災害に見舞われた。死者1人、床上・床下浸水1542世帯などの甚大な被害が生じ、市社協は6日後の18日に災害ボランティアセンターを開所。黒田さんもその運営に携わった。

「地域づくりを考えるうえでも、貴重な経験でした」

行政区によっては、区長や民生・児童委員、自主防災組織の役員らが被災状況を調査し、集約。ボランティアの派遣は、「何日何時に地区公民館に何人」という形で行われ、その先は役員らが各世帯の被災状況に応じて振り分けた。そのため、被災家屋の片付けなどの作業は効率的かつ効果的に進んだ。一方で、派遣要請が世帯ごとに行われた区もある。

「自主防災の仕組みもさることながら、住民同士が顔の見えるつながりを築いていたかどうかが大きいと感じています。つながりがあれば、区長や民生・児童委員は情報を集めやすいでしょう。避難の呼びかけや安否確認でも、日ごろお茶飲みを楽しんでいるとか、気軽に家を行き来できるといった、日常の関係性に左右される面もあるのではないでしょうか」

黒田さんは仙台市出身、角田市在住の43歳。夫と3人の子どもとの5人家族。「しゃべる・食べるが大好き」で、訪問先で出された郷土料理、おいしい漬けものなどは必ずレシピを聞いて自分で試す。モットーは「ま、いいか」。楽天的なチャレンジャー、そんな人柄も武器に、地域づくりに果敢に挑み続ける。

利

市地域包括支援センターと市社協の月例会議（右から3人目が黒田由希子さん）

## わがまちのお宝紹介

【後藤商店】平貫下（ひらぬきしも）地区にある創業百年近い酒類と食料雑貨の店。主に60～80歳代の女性10人前後が入れ替わり立ち替わり、3代目店主・後藤美智子さん（82歳）を囲み日々お茶飲みを楽しむ。後藤さんは足腰を痛めて歩行が不自由になったが、店を続けて自身と仲間の大事な「居場所」を守る。毎週火曜の午前11時ごろ、店に生鮮・日用品、惣菜、菓子・パンなどを扱う移動販売車「虹の園」（運営：社会福祉法人臥牛三敬会）が来る。これを目当てにお茶飲み仲間が勢ぞろい。

生活支援コーディネーターに聞く

「まちづくりの今」⑪

多賀城市 西部地域

**多賀城市**

【たがじょうし】人口6万2372人（2万7226世帯）、高齢化率24.5％（2020年1月末）。生活支援コーディネーターは、第1層を市介護福祉課の担当者が、第2層を西部、中央、東部の3地域包括支援センターの職員が務める。コーディネーターらは毎月の定例会議で情報共有と活動方針の検討、確認を行う。協議体は、第1層は市の地域包括支援センター運営協議会が兼ね、第2層は新設または既存の集いの場を活用、構成員の異なる複数の協議体を運営している。

# ケアマネの利点活かして地域と関わる

## 今野まきこさん

今野まきこさん（「丘の上の女子会」で）

### 地域のお宝を協議体にする

「生活支援コーディネーターになって、ケアマネの仕事も少し変わりました」

こう話すのは多賀城市西部地域包括支援センター（以下、包括）の管理者で、主任ケアマネジャーの今野まきこさん。2016年4月から西部地域担当の第2層生活支援コーディネーターを兼務する。

「一番変わったのはアセスメントに臨む姿勢でしょうか」

アセスメントとは、介護保険サービスの利用に必要なケアプランや介護予防プランの作成に際し、利用者の心身の状態、生活状況、ニーズなどを調査・評価すること。ケアマネ業務の柱の一つだ。

「以前はケガや病気の既往歴、現病歴、生活課題などに意識を集中していました。今は、近所付き合いはあるか、あるならどんな付き合いか、老人会やサークル活動に参加しているかなど、地域とのつながりを注意深く聞くようにしています」

つながり、集いの場、日常の暮らしのなかで何気なく行われる見守りや支え合いといった「地域のお宝」を、アセスメントで発掘する。

「包括職員の強みですよ」

今野さんがケアプランを担当する、ある男性高齢者を通じて、食料品店が住民の集いの場になっているのを発見。店を訪ねて店主らに話を聞くと、さらに二つのお宝が見つかった。

一つは、すでに廃業した近くの別の商店。店舗兼住宅に90歳代の夫婦が暮らしている。夫は要介護2の認定を受け、デイサービスを利用。妻が在宅介護を担う。認知症もある夫は朝、店のシャッターを開け「営業」を始めてしまうことがある。すると妻は近所の友人たちに電話、「買いもの」に来てもらう。

「奥さんは、たとえばティッシュを買うふりをしてと友人に頼み、友人は店に来てダンナさんにティッシュをくださいと言います。奥さんは買い置きのティッシュを店に出し、ダンナさんが売るわけです」

接客をすると、夫は落ち着きを取り戻す。

「認知症になっても自分らしさを失わないダンナさん、彼を見守る奥さんと友人たちの機転、こんな素敵なことってあるでしょうか」

夫はただ支えられるだけの存在ではない。認知症の症状の現れ方や、どんな気遣いや手助けが在宅生活の継続に役立つかを私たちに教える「講師」になっている。

もう一つは、70～80歳代の女性たちが、家を行き来して喫茶や食事をともにする親睦の集い、「丘の上の女子会」だ（次頁囲み記事）。メンバーは一人暮らしや日中一人暮らし状態の人、夫に先立たれた人などさまざまだが、全員が長年同じ地区で暮らす近所同士。中心人物の一人、丹治きよみさん（78歳）は、「近所の仲間とは毎日のように会う。『いだすかー、なじょなのー』（いるの、どうしてるの）って遊びに行ったり

来たり。家事やサークル活動もあるから、毎日忙しい」と話す。息子夫婦と同居だが、2世帯型住宅で生活全般をあえて別々にしている。「何でも自分でやったほうが健康にいいのよ」。実質的に一人暮らしで、その丹治さん宅が女子会のメーン会場になっている。楽しい時間を共有して孤立を防ぎ、困りごとがあれば助け合う。

今野さんは、女子会を西部地域の協議体の一つと位置づける。月に1度、10人ほどのメンバー全員が丹治さん宅にそろい、今野さんともう1人の生活支援コーディネーター、生活支援体制整備を所管する市介護福祉課の職員も加わって、理想とする地域像やその実現に向けた方策などを話し合う。

## わがまちのお宝紹介

【丘の上の女子会】多賀城市浮島地区の丘陵地に暮らす70～80歳代女性10人ほどが、主に丹治きよみさん（78歳）宅で開く喫茶や食事の会。メンバーは「50年来の付き合い」（丹治さん）で、普段からお互いの家を行き来し、おすそ分けやお茶飲みはしょっちゅう。「誰の家でもわが家みたいに過ごせる」（同）。体調を崩した人がいれば、すぐに気づいて駆け付ける。車を持つ人が、仲間の買いものなどを助ける。夫に先立たれた人限定で「美望人（未亡人）会」と称する飲み会も。

## ケアマネたちのお宝づくり

西部地域の協議体は、2020年2月末時点で計6つ。うち1つは、西部全体を視野に地域づくりを話し合うもので「となりぐみ」と呼ばれる。メンバーは行政区長、民生・児童委員、老人クラブ会長、介護事業所職員など9人。会合は年3回程度。

残りの5つは隣接するいくつかの行政区をまとめた小地域の話し合いの場で、「小さなとなりぐみ」と呼ばれる。会合はそれぞれ月1回程度。メンバーは各区の役員や民生・児童委員らが推す地域づくりの実践者、住民活動や近所付き合いに積極的な人、地域のもの知りといった「お宝的人物」10人前後。話し合いのテーマに応じ、メンバーや生活支援コーディネーターが自由に友人知人や有識者らを招いていい。女子会のようなお宝をそのまま小さなとなりぐみとするのも可。

小さなとなりぐみは、話し合いの枠組みであり、実践の場でもある。話し合いをきっかけに、災害時の炊き出し訓練を兼ねた集いの場が実現するなど、着々と成果を挙げている。

となりぐみ・小さなとなりぐみが一堂に会する情報交換会が、年に1度開かれる。それぞれの話し合いの内容、地域づくりのアイデア、実践などを披露し合う。

「お宝的な人たちの生き方には、高齢になっても元気に暮らす知恵と工夫が詰まっています。協議体同士の交流や情報交換は、お宝に磨きを掛け、広めるための重要な機会になります」

広める取り組みとしては、市全域を対象とする「お宝事例発表会」（実行委員会主催）も2016年度以降、毎年開催。2019年度は今年1月18日、市文化センターで開かれ、お宝の関係者、一般市民、市長や市職員など200人あまりが参加。西部地域からは、女子会のほか1団体がお宝として紹介された。

今野さんはまた、西部地域の居宅介護支援事業所に所属する8人ほどのケアマネとも連携を深めている。

「ケアマネジャー連絡会議という自主的な勉強会で、3年ほど前から生活支援体制整備や地域のお宝を検討テーマの一つにしています」

小さなとなりぐみ（南宮地区）でファシリテーターを務める今野まきこさん（中央奥）

ケアマネとしてどう地域と関わるべきか、介護予防プランなどに地域のお宝をどう生かすかなどについて議論を重ねる。一方で「机上の検討だけでは限界がある」と、介護サービス利用者が地域とのつながりを保つ、または回復するための新たな「お宝的集いの場」づくりにも着手した。具体的には、今野さんが発掘したお宝的人物を講師に、郷土料理教室や日曜大工講座を定期的に開く。主な参加者は、要介護認定を受けた高齢者。連絡会議のケアマネたちが、手弁当で運営に当たっている。

「デイサービスを利用している認知症の女性が、料理教室で包丁を持つと、別人のようにいきいきと調理を始めたんです。担当ケアマネは非常に驚いていました」

交流の機会を得て人とつながる、役割を持って活躍できる、そんな場と、そこに集う人たちが、お宝になる。

「高齢になってもこんな素敵な暮らし方がある、誰でもできるはずだって、みんなに知ってほしい」

今野さんは秋田市出身、利府町在住の52歳。「よそ者だからかえって（担当地域の）住民に何でも遠慮なく聞けます」。包括業務を受託する社会福祉法人千賀の浦福祉会に勤続23年。包括の仕事は13年目に入る。生活支援コーディネーターになったとき、住民に対し「定年まで地域づくりに身を捧げます」と宣言、親しみと信頼を勝ち取った。住民にとっては今野さんも、かけがえのないお宝の一つになっている。

利

# える全国セミナー」を開催しました!

**宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡会議では、「第4回 宮城発 これからの福祉を考える全国セミナー」を2020年2月14日(金)に太白区文化センター楽楽楽ホール(仙台市)で開催しました。生活支援コーディネーターや地域の活動者、自治体・地域包括支援センター・社会福祉協議会の職員など350人が参加。2部構成のセミナーの内容を、ダイジェストでお伝えします。**

第1部は、生活支援体制整備事業の取り組みについて、「お宝探しと地域歩き」「協議体ってどう進めるの?」という2テーマのもと、4つの実践発表を行いました。

## 第1部 その1 【お宝探しと地域歩き】

### ○南三陸町の実践

東日本大震災で大きな被害を受け、コミュニティが脆弱化した南三陸町では、個別支援だけでなく、地域のなかでつながりを取り戻す支援に取り組んできました。町民を雇用して、「生活支援員」とし仮設住宅を支援した経験が、生活支援コーディネーターの活動の基礎となっていきました。

生活支援コーディネーターは、地域の支え合いを推進する役割として、毎日地域を歩き、地域のつながりである「お宝」を100か所以上見つけてきました。74行政区のうち2地区では、高齢者の暮らしぶりや介護に対する不安・疑問などを聞き取る調査を実施。その結果を、地域包括ケア推進協議会、協議体、地区役員、ケアマネジャーに報告し、懇談会や情報交換会を開いて話し合う場につながりました。

同町社会福祉協議会生活支援コーディネーターの芳賀裕子さんと千葉ユミさんは、お茶会や体操をする会が、会の活動とは別に、それぞれの暮らしぶりを気にかけ合う関係性となっていることを発表。「仲間の存在が、在宅と施設の間の領域を広げている。こうしたご近所仲間のちょっとした手助けが、ぎりぎりまで自宅で暮らし続ける可能性を高めてくれる」と話しました。

### ○仙台市太白区秋保地区の実践

仙台市太白区の秋保地区では、秋保地域包括支援センターの4人でお宝探しに取り組み、見つけたお宝を発信しています。

高齢者・障害者の施設・事業所と総合支所をまとめた「あきう福祉相談マップ」、町内のサロン、老人クラブ、自主グループをまとめた「あきうつどいマップ」の作成や、ケアマネジャーなどの交流会・勉強会と秋保のスポットの紹介を兼ねて開催する「秋保deお世話になってます!交流会」「秋保のお宝さがし(包括圏域会議)」などを実施しています。

「秋保のお宝探し」は、住民、中学校校長、消防署、福祉施設、行政、JA女性部などさまざまな人が参加しました。「地域づくりと支え合い」と題した講義とグループワークを行い、グループワークで出してもらった、自然、文化、芸術、ご近所付き合い、お茶飲み、おすそ分け、何気ない見守りといった秋保のお宝を発表してもらいました。

同市秋保地域包括支援センター生活支援コーディネーターの添田拓三さんは、「住民の皆さんは、暮らしのなかでお宝に気づき、さまざまな活動をコツコツと続けてこられている。そうした秋保の魅力、活動を発信し、つながりをもってもらうことを意識して活動したい」と話しました。

発表を受け、さわやか福祉財団東北ブロックインストラクターの渡邊典子さんは、「人と人とがつながっていくとふれ合いが深まり、困ったときはお互いさまという気持ちが自然に芽生え、支え合い・助け合いの深さが深まっていく。お宝を認め合い、生かし合い、支え合い、つながり合い、学び合い、成長し合って地域を楽しく明るくしていただければ」とエールを送りました。

コーディネーターの東北福祉大学教授の髙橋誠一さんは、「コーディネーターはつなぐ役割。住民同士をつなぐ役割から、住民や行政、介護の専門職など、地域づくりをしているいろいろな人をつないでいく活動に広がりを見せている。地域づくりは、やればやるほどいろいろなつながりが見えてくる。お宝探しや生活支援コーディネーターの活動は、積み重ねのなかで悩みながら新たな取り組みをするなかで培っていける」と締めくくりました。

第1部　その1

# 「第4回 宮城発これからの福祉を考

## 第1部 その2

### 【協議体ってどう進めるの？】

**○角田市の実践**

角田市の協議体は、市直営地域包括支援センターが主体となり、市社会福祉協議会の生活支援コーディネーター4人も一緒に関わって進めています。

協議体を進めるにあたり、まず自分たちが理解し、共有するところから始め、「地域のことについて話をしていく場」であることを、協議体に参加する人に伝えてきました。協議体を会議体にしないために、会場のレイアウトを工夫し、目的を理解してもらうための勉強会からスタートしました。

勉強会では、1回目に角田のいいところを話し合い、参加者から話題を出してもらいました。2回目は、角田の眠っている・消えてしまったお宝を考えてもらい、地域の組織やお祭りなどを出し合いました。3回目からは、話し合いを円滑に進めるためにホワイトボードを使用し、4回目は個別ケースについての話し合いをしました。

取り組みをとおして、同市社会福祉協議会主幹兼地域福祉係長兼生活支援コーディネーターの岡本圭一郎さんは、「協議の場は、『普段の会話を引き出せる雰囲気づくり』『参加者の意見を否定しない』『地域のことは地域のなかで話をする』『慌てずにゆっくりと入り口を丁寧に』という点がたいせつ」と話しました。

第1部　その2

**○兵庫県淡路市の実践**

兵庫県淡路市では、新たな協議の場をつくることがなぜ必要なのかを話し合い、地域にもともとある協議の場を生かすことができていなかったのではないかという反省から、今ある協議の場を生かすコーディネーションが必要と考えました。

「協議の場はそれぞれが相関してうまくいく」と話すのは、同市社会福祉協議会事務局次長の岩城和志さん。第1層生活支援コーディネーターである岩城さんと、第2層生活支援コーディネーターが地域のさまざまな会議に関わり、その間をつないでいくことに重点を置いています。「3人寄ったら協議の場」と位置づけ、似たようなことを話している人たちを引き合わせて、活動が生まれていくのが淡路流です。その際のポイントは、「長期的に関わっていく」「しんどくても抜け目なく関わる」ことだと言います。

協議体とは、「普段の暮らしのなかで、これからこうあってほしい、こうなりたいという思いを主体として協働してやっていくもの」と岩城さんは話します。協議体をあえてつくらず、いろいろな協議の場に出向くことで、かえって協議体が広がっていると報告しました。

仙台白百合女子大学准教授の志水田鶴子さんは、2人の発表を聞き、「運営する側が生活支援体制整備事業をきちんと説明できるか。なぜ協議体があるべきなのかを説明していくなかで、進むべき方向性やビジョンを共有していける」とコメントしました。コーディネーターを務めた全国コミュニティライフサポートセンター理事長の池田昌弘さんは、「生活支援コーディネーターと協議体が一体化して相互に動くことで広がりを見せ、課題の解決につながっている。住民に巻き込まれて、住民に学ばせてもらって地域を一緒に考えていく体験を積み重ねていってほしい」と会場に呼びかけました。

**協議の場（協議体群）参画表**

| 協議体の地域層 | 直接参画 | | | 間接参画 |
|---|---|---|---|---|
| 第1層 協議体群（市域） | 社協理事会（毎月）<br>生活支援Co会議（毎月）<br>保健師・Co協働会議（毎月）<br>訪問介護事業所連絡会（毎月）<br>通所介護事業所連絡会（毎月） | 福祉活動専門員会議（毎月）<br>認知症SOS会議<br>地域密着型サービス運営委員会<br>島くらしカフェ<br>淡路市ボランティア連絡会 | 地域密着型サービス運営委員会<br>淡路市ボランティア連絡会<br>介護者の会準備会 | 市高齢者支援センター運営協議会<br>認知症初期集中支援チーム検討会<br>ポケットあわじ編集委員会<br>まあるくの会<br>サービス決定会議 |
| 第2層 協議体群（旧町域） | 地域支えあいセンター運営委員会（つなぐ・いわや・ほくだん・いちのみや・ひがしうら）<br>ふれあいサロンボランティア連絡会<br>いわやボランティア連絡会<br>つなぐボランティア連絡協議会 | 岩屋民児協定例会<br>ひまわりの会<br>デイミリオン設立準備会議<br>おひさまカフェ<br>地域ケア会議 | ほくだんボランティア連絡会<br>いちのみやボランティア連絡会<br>東浦民児協定例会<br>ふれあいサロン連絡会議（東浦）<br>つながり代表者会議 | 地域支えあいセンター運営委員会<br>地区社協連絡会（ほくだん）<br>退職教職員の会 |
| 第3層 協議体群（旧小学校区域） | 津名地域地区民児協（富島・鮎原・北淡・尾崎・生穂・佐野）<br>中田地区まちづくり協議会<br>大町地区まちづくり協議会<br>佐野地区まちづくり協議会<br>塩田公民館定例総会 | 生穂公民館福祉研修<br>釜口地区町内会長会<br>地区社協定例会（野島・富島・仁井・浅野・育波・佐野）<br>山田まちづくり協議会<br>江井交通問題を考える会 | 一宮地域地区民児協（尾崎・郡家・多賀・江井・山田）<br>山田老さく会<br>尾崎ふれあい交流広場<br>尾崎女子会<br>地区別あんしんネットワーク会議 | 地区社協理事会 |
| 第4層 協議体群（町内会域） | つながりねっと（長澤・酒の町・東の町・橋本・神宮前・中の町・片浜・松帆・出の代・鵜崎・つながり） | あんしんネットワーク会議（東浦11会場） | | |

淡路市の協議の場（協議体群）参画表

## 第2部 地域共生社会に向けた地域づくり

第2部では、地域共生社会の実現に向けて、住民がやりたいことを自分たちで叶えることで、結果的によい地域づくりにつながっている4団体の活動事例を学びました。

### ○つるがや畑プロジェクト（仙台市宮城野区鶴ケ谷地区）

災害公営住宅「鶴ケ谷住宅」は、仙台市宮城野区鶴ヶ谷包括圏域（高齢化率36.1％）にあります。2015年の入居開始後のウェルカムパーティーを機に、「畑仕事をしたい」と住民有志3人が呼びかけ、発足。畑仕事の経験豊富な協力者や、町内会、民生委員、鶴ケ谷地区社協、仙台市社協宮城野区事務所、NPO法人暮らしのサポートセンターなどの協力を得て、地域からお借りした畑で開墾から始めました。野菜の収穫時は、住宅の集会所で地域住民も招き、芋煮会を開催しました。「S-1グランプリ第5回いがす大賞」や「市民センターまつり」などでのステージ発表にも挑戦し、練習を重ねるなかで団結を深めたと、副会長の千葉達子さんは話します。

活動に協力する鶴ヶ谷地域包括支援センターの生活支援コーディネーター、平松よし江さんらは、畑の耕作の相談に来所した地域住民をつなげ、参加者の希望を拾って介護予防教室や保育園児との畑作業も企画。つるがや畑プロジェクトは、地域の認知症カフェへも、実行委員として参加しています。

### ○東お茶っこ会（栗原市）

栗原市若柳地区で2012年に始まった東お茶っこ会は、毎月第3日曜日、朝から夕方までの集いの場です。昼食は季節の郷土料理を手づくりし、おかずを一品持ち寄ります。

「願いを叶えてくれる場でもあります」と若柳地区生活支援コーディネーターの髙橋由利さん。一度施設に入居したメンバーもいますが、お茶飲み仲間に見守られて、再び住み慣れた自宅に戻って暮らしています。参加者の願いを受けて、第2層協議体の構成団体でもある理美容組合の協力のもと、お化粧教室を開催したこともあります。理容師には化粧ポーチをつくってお礼をしました。

また、宮城県迫桜高校から相談を受け、お茶っこ会の世話人が郷土料理を教えました。その後も会に高校生を招くなど、交流が続いています。

コメンテーターの仙台市社協事務局次長の髙橋健一さんは、若い世代とともにつながっていることが願いをかなえる秘訣だと指摘。一緒に登壇した高校生に、「世代を超えた交流の魅力を体験している。ぜひ後輩にも引き継いで」と語りかけました。

東お茶っこ会の皆さん

### ○踏み切り手前のお茶処（気仙沼市）

西条喜久子さんは、45年前に気仙沼市太田地区でご主人と二人で鮮魚店と仕出し屋を始めました。仕事帰りに「ただいま」とお店に立ち寄ったお客さんを、「お疲れさま」と西城さんが迎えるような関係でした。ご主人が病気をした時は、地域の人がお店にイスや棚をつくってくれ、ご主人は亡くなるまでそこに腰かけて、お客さんとの会話を楽しみました。

西城さんは朝に市場に行き、午前中のうちに仕込みを行います。お昼過ぎからお客さんが来て、お茶飲み話に花を咲かせます。話題は、昔のこと、体調のこと、これからのこと。お客さんと笑い合う時間が、西条さん自身の癒し、活力にもなっているそうです。「『お宝』は西条さん、常連さん、地域全体でした」と同市社会福祉協議会第2層地域支え合い推進員の藤村由喜さん。

コメンテーターの髙橋さんは、「いろいろな要素が詰まった地域の居場所であり、協議体ともいえる」と意味づけます。

### ○塙山学区住みよいまちをつくる会（茨城県日立市）

塙山学区住みよいまちをつくる会は、塙山小学校の開校とともに1980年発足し、住民交流、青少年育成、地域福祉、環境、防犯、防災などに取り組んできました。5年ごとにコミュニティプランを策定。地区社協の機能も有し、現在は活動の6割が福祉に関するものです。サロン活動や「相乗りタクシー」事業、なんでも相談窓口、困りごとを有償でサポートする「あんしん」事業、生活支援相談員・地域福祉コーディネーターの独自配置などに加え、高齢者向け「ふくしかわら版」を発行・手配りし、見守りを兼ねています。得た情報は「安心カード」に記録し、支援時に活用します。課題を抱えた人の在宅支援を考える「コミュニティ・ケア会議」も関係機関と開催。

会長の西村ミチ江さんは、「まちづくりは終わりのない旅のようなものですが、みんなで住んでよかったと思えるまちづくりを続けます」と話します。

最後に、東北こども福祉専門学院副学院長の大坂純さんが、「まずは動くことで、視野やつながりが広がります。それから深めることで、施設から地域に戻って暮らせるなど、さまざまなことができるようになります」と総括。「コーディネーターは、住民に教わったことを同僚や上司、委託元に伝え、生活を豊かにするために一緒に考えていく。活動のよさを伝えるお手伝いをするのも仕事です。今日聞いたことを一人でも多くの人に話して共有することが、介護が必要になっても暮らし続けられる地域づくりにつながります」と呼びかけました。

住み慣れた地域で暮らし続けるためのお宝探し情報紙
MiYAGi まちづくりと地域支え合い vol.27
バックナンバーがホームページで読めます http://www.clc-japan.com/sasaeai_m/
発行日 2020年3月30日
発 行 宮城県保健福祉部長寿社会政策課
編 集 特定非営利活動法人全国コミュニティライフサポートセンター（CLC）